

「生きる」現場で ②

いのちに寄り添う

過疎とまでは言えないが

人口流出に悩む。京都府南丹市のそんな典型的な山間の集落で、臨済宗妙心寺派瑞雲寺は住民の結び付きのために年中寺を開いている。生老病死の生活の基盤である地域の振興が狙い。

「一村一力寺の地域密着グラン্ডフリースペースで入れるのが“地区の宝”である子供たちを中心とした取り組みだ。中でも毎年

8月24日の「地蔵盆子供大会」は地域ぐるみの最大の行事だ。

子供中心の行事

例年は帰省者も含めて100人近くが参加し、子供たちはまず地蔵壇が祀られた本堂に正座して般若心経を唱える。住職の「お地蔵さんは子供が大好きで、皆を気にして守ってくれます」との話もそこに、寺庭に飛び出した。ダーツやヨーヨー釣りなどのゲームに、ポップコーンやタコせんべいの模擬店などを全て住民が運営し、子供たちは好きな所へ駆け寄って大はしゃぎ。ゲームで得点を挙げると菓子などの賞品をもらいい、境内には歓声があふれる。親たちや高齢者も童心に帰つて一緒にゲームに興

じる。

夕刻にはそろめん流しに皆が群がり、フォークダンスや花火見物に幼児から大人までが気持ちを一つにしました。この間、長門住職はTシャツ姿で携帯マイクを肩に、ゲームの進行をはじめ歌やダンスを自ら率先して指導するなど7時間余りひと晩も休むことなく汗だくで動き回っていた。これ

は一昨年の光景だが、コロナ禍に入つても安全対策を徹底しながら工夫してきた。

あくまで子供会が主体で大会長などは児童が務め、住職や大人たちは世話人。

普段でも子供の日には児童らが寺でキャンドンをし、花祭りには境内の花御堂をチェックポイントに組み込んだ地区のオリエンテーリングで楽しむ。老人会と婦人会が協力する彼岸の集いは食事会や花笠音頭で盛り上がる。坐禅会、鉢植えやリースの手作り教室など、

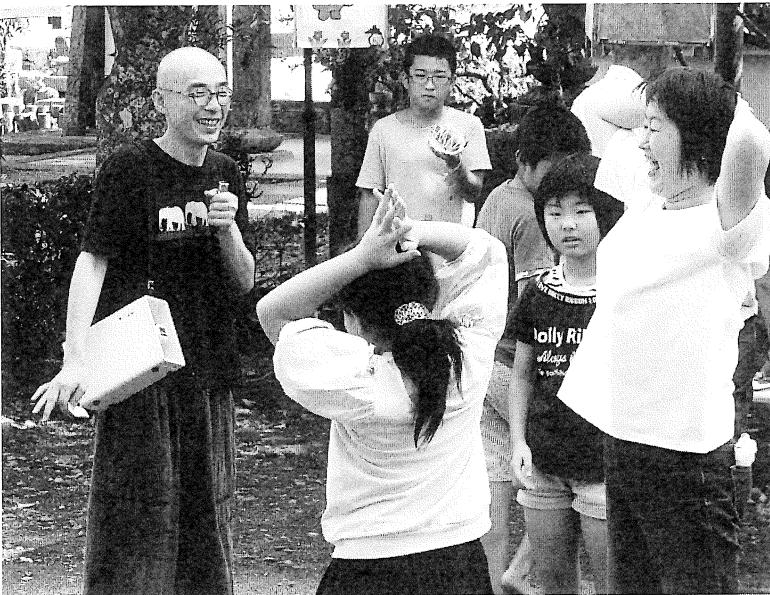
京都府南丹市・瑞雲寺

地元の大人はほとんどが昔からの子供会のOBで、「私は卒業できていない子供会員。大人の目線、子供の心で一緒にになって樂しいことをたくさんあります」と

長門住職。地域の親の会や大学生リーダーたちも運営をバックアップするが、子供たちが運営でも主役だ。

住職は「誰もがほほ顔見知りという土地で、寺で何をするにも地区役員や檀家の理解を頑いでいる」と強調し、教化活動も自然体だ。例えば「子供坐禅会」。夏休みの始めと終わりに朝のテレビ体操とセッションで開かれ、朝6時半に幼稚園児から中学生まで十数人が本堂に入ると親ら大人も同じくらい集まる。

このは、長門住職の普段からの話しぶりがあるからだ。法事や催しの度に、寺がそこにある意義を「ここに眠る『先祖がいたから私たちがいられるんだよね。親戚でなくとも、かつてどこかで世話になった人たちもここにいます』と説く。そして「お寺は和尚のものでも、檀家さんだけのものでもない。今生きている者だけのものでも、亡くなつた御靈だけのものでもない。これから生まれる人も含めて、仏さんの世界に関わった、仏さんに手を合わせることができる、全ての皆さんの出入り自由の場なのです」と。



子供大会で参加者と盛り上がる長門住職